



Data

監督・脚本：チェン・ユーシュン
出演：リウ・グァンティン／パティ・リー／ダンカン・チョウ
／ジョアン・ミシンガム

👁️👁️ みどころ

台湾には、ホウ・シャオシェンやエドワード・ヤンのような先発完投型の本格派がいれば、チェン・ユーシュンのような下手投げの変則型左腕ピッチャーもいる。『熱帯魚』や『ラブ ゴーゴー』はその典型だったが、彼が長年構想を温めていた本作はまさにそれ！こんな映画、観たことない！

邦題はアインシュタインの「相対性理論」を彷彿とさせる難しさ(?)だが、本作はやっぱり原題と英題の方がピッタリ。しかし、“失われたバレンタインデー” 都是一体ナニ？

本作は、頭の固い人向きではない。あくまで頭を柔らかくして、スクリーン上に登場するすべてのエピソード、すべての物語を受け入れる度量(?)を持たなければ！それができれば、本作は最高傑作だが・・・。



■□■久しぶり！台湾のチェン・ユーシュン監督最新作は必見■□■

1990年代の台湾を代表する監督は、ホウ・シャオシェン(侯孝賢)とエドワード・ヤン(楊徳昌)等“台湾ニューシネマ”と呼ばれる巨匠たちだが、それに続く“台湾新世代”の“異端児”として出現したのが、1962年生まれのチェン・ユーシュン(陳玉勳)監督だ。ところが、長編デビュー作『熱帯魚』(95年)と、それに続く『ラブ ゴーゴー』(97年)で、主に若い世代からの熱狂的人気を獲得した彼は、その後CM業界に活躍の場を移し、映画製作から離れてしまったから、アレレ・・・。その後、2013年に『祝宴！シェフ(総舗師)』で復帰した彼の、復帰後第3作目が本作だ。

私が台湾のチェン・ユーシュン監督をはじめて知ったのは、2019年10月にシネ・ヌーヴォーで開催された「台湾映画傑作選」で『熱帯魚』と『ラブ ゴーゴー』を観た時だ。したがって、私にとって彼の最新作は1年8か月ぶりだが、『ラブ ゴーゴー』の公開年か

ら数えればすでに23年経っているから、彼の最新作はホントに久しぶりだ。

私がデジタルリマスター版で観た『熱帯魚』と『ラブ ゴーゴー』では、チェン・ユーシユン監督のユニークさにビックリ。当然、この手の映画の監督は脚本も兼ねているが、『熱帯魚』では誘拐という凶悪犯罪の中にも、身代金要求を巡る物語にはほのぼの感があったし、犯人を追う警官達も牧歌的だった。そして、全く読めない展開の中、最後には誘拐事件もハッピーエンドに収束させていくお手並みは見事だった（『シネマ47』259頁）。続いて、恋愛モノに挑戦した『ラブ ゴーゴー』では、“個性豊か”、というより、ハッキリ言って“はみ出し者”の3人の主人公が織り成す吉本新喜劇風の恋愛ドタバタ劇と、展開が全く読めない怒涛の展開がメチャ面白かった（『シネマ47』264頁）。

そんなチェン・ユーシユン監督の久しぶりの最新作は必見！

■□■第57回金馬獎で最多5冠！本作のテーマは？■□■

「台湾のアカデミー賞」と言うべき第57回金馬獎では、7月1日に観たチェン・ヨウジエ（鄭有傑）監督の『親愛なる君へ（親愛的房客）』が最優秀主演男優賞、最優秀助演女優賞、最優秀オリジナル音楽賞の3冠をゲット。それに対して、本作は作品賞、監督賞、脚本賞、編集賞、視覚効果賞の最多5冠をゲットしている。その優劣を評価すれば、演技面では『親愛なる君へ』が優位だが、作品の出来としては本作の方が優位・・・？それはともかく、私はこの金馬獎レースからは、本作に見るチェン・ユーシユン監督の脚本に注目したい。

『親愛なる君へ』のテーマは、「今は亡き同性パートナーの母と子の血のつながりを超えた家族の絆を紡ぐ物語」という“クソ難しい”ものだった。それに対して、本作のテーマは、「人よりワンテンポ早い彼女とワンテンポ遅い彼。2人の中のちょっとした時差（タイムラグ）から生まれるかつてない奇跡」だが、それってナニ？本作の原題は『消失的情人節』だが、中国語の勉強が進んでいる私には「情人節」とはバレンタインデーのことだとわかる。また、『消失的情人節』は直訳すれば「失われたバレンタインデー」だし、英題も『My Missing Valentine』だ。日本ではバレンタインデーは2月14日で、女性から男性にチョコを渡す習慣になっている。しかし、台湾ではバレンタインデーは年に2回あり、2月14日より7月7日の「七夕情人節」の方が重要なイベントらしい。また、中国でも台湾でも、日本とは逆に、男性から女性にチョコをプレゼントするものとされている。なるほど、なるほど。しかし、「消失的」って一体ナニ？

他方、本作の邦題は『1秒先の彼女』だが、それも一体ナニ？ちなみに、チラシには、山内マリコ（作家）の「こんな映画、観たことない。まぎれもなく、まったく新しい、物語の可能性に満ちたラブストーリー！」の文字が躍っている。パンフレットにも、同氏の「こんな映画、観たことない。」という Review があるが、本作はそんなに変わっているの？本作の評論を書いている7月4日の夜には、キアヌ・リーブス主演の『マトリックス』（99年）がTVで放送される。仮想現実空間を舞台に、人類とコンピュータの戦いを描いた

SF アクションたる同作では、香港アクション界の雄、ユエン・ウーピンをアクション指導に招いて取り入れたワイヤーアクションと、バレットタイムと呼ばれる撮影法によって生み出された革新的なアクションシーンが見もので、約20年前の「こんな映画、観たことない」映画の典型だった。しかして、本作のテーマは？タイトルの意味は？

■□■まずは自己紹介から！なるほど、それを邦題に！？■□■

7月1日に観た台湾映画『恋の病～潔癖なふたりのビフォーアフター～（怪胎）』は「潔癖症&不器用な彼」と、「潔癖症&窃盗症の彼女」の自己紹介から始まり、2人の面白い出会いから物語がスタートした。それと同じように、本作も、郵便局の窓口で働く30歳の独身女性ヤン・シャオチー（リー・ペイユー（李霈瑜））の自己紹介から始まるが、彼女を特徴づけるものが、邦題の「1秒先の彼女」ということだ。つまり、シャオチーは幼い頃から何でもワントレップ早いという設定だが、そんな人間が日常生活を営むのは大変だ。

ちなみに、郵便局での彼女の仕事ぶりを対比的に説明するために登場するのが、シャオチーの隣に座る女性ペイ・ウェンだが、それを美人女優ヘイ・ジャアジャア（黒嘉嘉）が演じていたから私はビックリ。彼女は私が日曜日毎に見ているNHK 囲碁講座の「囲碁フォーカス」のミニレース「黒嘉嘉のGO ビギナーズ」の講師を担当している、本物のプロ棋士だ。囲碁界での若手女性棋士の台頭は将棋界をはるかに越えており、藤沢里菜、上野愛咲美が両トップ。それを12歳の仲邑菫が追っている状況だが、ヘイ・ジャアジャアはモデルをしたり、CM やミュージックビデオに出演したりと“二足の草鞋”を履いている珍しいキャラのプロ棋士だ。もっとも、本作を観ている限り、彼女の演技力はハッキリ言って、まだまだ・・・？

それはともかく、ペイ・ウェンと違って、男とは全く縁のないシャオチーはバレンタインデーにも全く縁がないから、今夜も1人でラジオを聴いていた。すると、ラジオからは「今夜のテーマは“失くし物”。一番忘れられない“失くし物”について投稿してね」と語るDJの声聞こえてきたから、シャオチーは、十数年前に豆花を買いに行くと云ったきり失踪し、そのまま戻ってこなかった父親を思い出すことに。なるほど、なるほど……。しかし、これって一体何の物語？

■□■偶然の出会いから恋の予感が！バレンタインデートは？■□■

そんな「1秒先の彼女」たるシャオチーが、ある日の仕事帰り、公園でダンスをしている集団に入っていくと、そのダンス教師である好青年のリウ・ウェンセン（ダンカン・チョウ）から声を掛けられたからシャオチーは何かが起こりそうな予感に胸をときめかせることに。すると、翌日リウが郵便局の窓口に現れ、「口座を作りたい」と言ってきたからこれはホンモノ！？

微笑みながらそんな2人を観ている隣のペイ・ウェンにバレないよう、メモの交換によって“映画デート”の約束を交わしたから、2人の展開は順風満帆だ。さらに、“映画デート”の帰り道、「明日のバレンタインの予定は？」、「ないわ、ずっとそうだった・・・」と

いう会話の後、リウは突然、幼い頃に自分と同じように、身寄りがなく施設で暮らす5歳の女の子の心臓移植費用が足りないことを語り出したから、ますます2人の距離は近づくことに。すっかり同情したシャオチーがそこで思いついたのは、明日のバレンタインに行われる大会に参加すること。そこで優勝すれば賞金と航空券がもらえるから、と参加することを決め、2人は指切りをすることに。

このように“映画デート”は順調だったが、さて、明日のバレンタインデートは？

■□■なるほど、これが消失的情人節！■□■

『ラブ ゴーゴー』は、吉本新喜劇的なドタバタ劇が奇妙に面白かった。それと同じように、シャオチーとリウとのバレンタインデートを巡って、本作は突然、ロマンチックラブコメディ風の展開から、吉本新喜劇風のドタバタ劇に転化していくので、それに注目！

「1秒先の彼女」は、目覚まし時計よりも目覚めるのも1秒早いはず。したがって、大切なバレンタインデートの日、朝8時の目覚ましより先に目覚めたシャオチーは、予定していた服に着替え、意気揚々と待ち合わせ場所に向かうべくバスに乗り込んだが・・・。

『マトリックス』では、さまざまな革新的アクションを観客に理解してもらうため(?)にスローモーションが多用されていたが、映画でそんな手法を使うことの賛否は分かれるはず。それと同じように、本作でチェン・ユーシェン監督は、なぜか8時35分になって慌てて飛び起きるシャオチーの姿をスクリーン上に映し出していきから、アレレ。この時、鏡に映るシャオチーの姿はパジャマではなく、デート服を着て日焼けで全身真っ赤だから、アレレ・・・。さらに、会場は閑散としており、清掃員に「バレンタイン大会の会場は？」と聞くと、「バレンタインは昨日ですよ」の答えだったから、アレレ。バレンタインは消えてしまったの？混乱するシャオチーは慌ててリウに電話したが、電話も繋がらなくなっていたから、さあ大変だ。なるほど、なるほど、これが消失的情人節！

■□■脚本は自由自在に！この3つの物語は？ワケわからん！■□■

本作はここから、「消えたバレンタイン」を探し始めるシャオチーの物語になっていく。そんな彼女の周りには、まさに“吉本新喜劇の台湾版”とも言うべき、3つの奇妙な物語が登場するから、それに注目！それが次の3つだ。

①通りにある写真館に飾られた、身に覚えのないシャオチーの写真（しかも目を開けている）。店主に聞くと「顔を腫らしたグアタイという男に現像を頼まれた」という。見ると、どこかの海辺で撮られているようだ・・・。

②ある夜、ブレーカーが落ちた部屋のクローゼットから、突如現れたヤモリから「あんなの失くし物だ」と言われて渡された、「038」の鍵。

③シャオチーと同じように、全身真っ赤に日焼けし、顔中殴られた姿のウー・グアタイ（リウ・グァンティン（劉冠廷））という名の“変人”の登場。彼はシャオチーと違って、人よりワンテンポ遅く、シャオチーの郵便局へ毎日手紙を出しに来る常連客の1人だが・・・。

「映画は何でもあり」だし「脚本は自由自在」だが、全く脈絡のないこの3つの物語の

提示は一体ナニ？ワケわからん！ホント、こんな映画、観たことない！

■□■後半の物語は？視点が大転換！ヒロインの自分探しは？■□■

前記3つの全く脈絡のない出来事は、何を意味するの？ある日、郵便局で私書箱のロッカーの鍵を手にした瞬間、シャオチーはどこかにあるはずの「038」の私書箱を見つけるための旅に出る決意をすることに。法律を勉強して弁護士になった私は、法廷で裁判闘争を展開するについては、徹底気に事実の追及が大切であることを学んできた。その目的はただ1つ、真実を発見することだが、何が真実かは神様しかわからないもの。したがって、裁判での真実は、さまざまな認定事実の積み上げとして、判決に記載された事実を過ぎない。そんなことを考えると、本作前半のラストに見た“失われたバレンタイン”は一体ナニ？そして、シャオチーが体験したバレンタインデー早朝の“2つの事実”は、一体どちらが真実？それが全く分からないまま、シャオチーは休暇を取り、列車に乗って旅に出たが、さて、本作後半の物語は如何に？

前記、山内マリコの「Review」には「物語にここから、大きくドライブがかかる。実はヤン・シャオチーの物語はA面に過ぎず、B面は視点人物がウー・グアタイに変転。窓口に毎日やって来て郵便を出す“あの変人”に！さらに消えたバレンタインデーの1日の謎が明かされるにいたって、もう一段階ドリフト」と書かれているが、本作後半はまさにそんな展開になっていくので、あっと驚きながらそれに注目したい。台湾は広いが、チェン・ユーシュン監督がそんなシャオチーの旅に登場させる舞台は『熱帯魚』の舞台と同じ嘉義県東石村だ。私は3度も台湾旅行をしているが、美しい東側の海岸線を観たのは1度きりだ。シャオチーが何度台湾の東海岸を旅したのかは知らないが、その旅でシャオチーが見たものとは？

パンフレットにある「Director's Interview」で、チェン・ユーシュン監督は「私の作品には全て『自分探し』という要素が入っています」と語っているが、さて、本作後半に見るシャオチーの自分探しの旅とは？

■□■誰が善人で誰が悪人？1秒のズレが積み重なると？■□■

人間を“見た目”で判断してはダメなことは常識だが、凡人はなかなかそれができない。したがって、イケメンや美女は何かと有利だが、そのことは、本作前半のハンサムなダンス講師チョウを見ているとよくわかる。しかし、“映画デート”の帰り道にチョウが語っていた心臓移植の話を知っていると、ひょっとしてこの男は詐欺師？そう感じた私が正しかったことは本作後半に立証されていくので、それに注目！

他方、本作後半の圧巻は、バスの運転手であるグアタイがシャオチーを含む大勢の乗客を乗せて市街地を走行中、なぜかすべての世界（交通）がストップしてしまうこと。子供の頃の私がテレビで大相撲を観戦していた当時は、対戦後のVTRによる再生はなく、“分解写真”による分析だった。もちろん、分解写真は1コマずつ動いていくが、本作では巨大なスクリーンの動きが、グアタイ以外すべてストップしてしまうからビックリ！こりゃー

体ナゼ？

それは、難しく言えばアインシュタインの「相対性理論」によるものかもしれないが、本作でその「仕掛け」が成立するのは、何事も1秒早いシャオチーと、何事も1秒遅いグアタイの“1秒のズレ”がある時、1日分まで積み重なった時に起きるらしい。なるほど、なるほど。

そんなストーリーの撮影は大変そうだが、それは製作陣の努力にまかせ、私たちはひたすら“失われたバレンタインデー”の1日間に、グアタイがいかなる行動をとるのかに注目したい。

■□■豆花は？失踪した父親は？物語の収束は？■□■

私の事務所のすぐ近くに最近、台湾風の朝食を“売り”にしたお店が開店したが、その人気は上々。しかして、本作導入部では「豆花を買いに行く」と言って出かけるシャオチーの父親の姿が描かれるが、台湾の豆花とは？それはストーリー構成上どうでもいいことだが、なぜ父親は失踪したの？という論点は、ストーリー構成上重要だ。しかし、「こんな映画、観たことない」と形容される本作では、次から次へとワケの分からないエピソードが登場するとともに、前半と後半で物語の視点を全く変えるという“転調”にビックリさせられるから、父親の失踪事件などとくに忘れてしまう。しかし、本作がラストに近づいてくると・・・。

7月6日に観た『アジアの天使』（21年）のラストは、韓国の江陵（カンヌン）の海の浜辺が舞台となり、そこに何とも奇妙な“アジアの天使”が登場してきた。しかして、本作でも“消失したバレンタインデー”の1日、すべての動きが停止する中、台湾の東海岸にある嘉義県東石村にバスを移動させ、シャオチーを浜辺に運び込んだグアタイが、記念撮影（？）を含むさまざまな行動をとるシークエンスが登場するので、それに注目！グアタイが毎日郵便局を訪れて窓口のシャオチーから切手を購入し、手紙を送っていたのは一体何のため？また、その手紙は誰に宛てられたもの？その中には何が書かれていたの？

本作でずっと見てきたすべての疑問は、物語のラストに向けてそのすべてが収束していくので、それはあなた自身の目でしっかりと！そうすればきっと、チェン・ユーシェン監督への拍手喝采の気持ちが生まれてくるはずだ。

2021（令和3）年7月12日記